

市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会

会長 大橋秀一郎

No. 6

平成3年11月1日発行

編集：総務委員 矢倉 睦

片岡泰彦氏

ナムチャバルワ遠征隊参加 !!

地球上に残された未踏の最高峰ナムチャバルワ（南迦巴瓦）峰7,782mに、日本山岳会より登山隊が派遣されていますが、当会より片岡氏が参加しています。

登山ルート： ナイブン峰経由の南稜ルート

登山時期： 1991年9月下旬～11月下旬 （予備日16日含む）

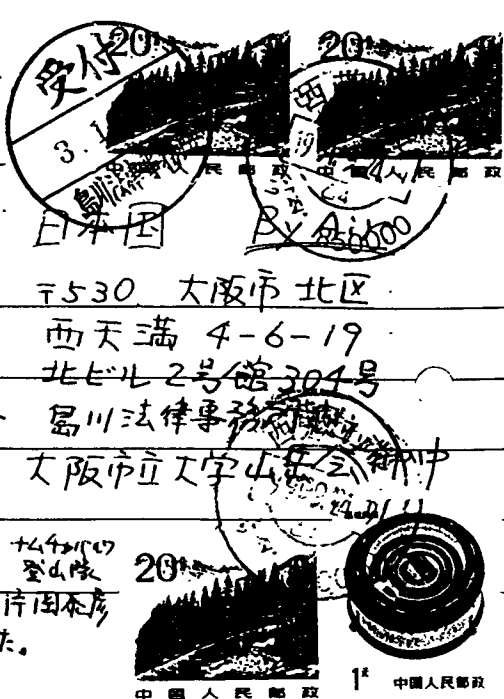
登山方法： 無酸素 ナムチャバルワ方式

（極地法とアルパインスタイルの併用）

以下に片岡氏よりのニュースをお楽しみください。

TIBETAN ARCHITECTURE

前略、色々御支援有難うございました。
卒業以来、何とか山登りを続けていた為
か、ナムチャバルワ登山隊員として、世界最
の憧れの山へ向う事となりました。もともと
NHKのマネージャーという立場ですので、カメラ
の上がる高さには依り到達高度もた石され
ますが、全力を尽したいと思っています。
東京での担任パーの折、NHKの高島局長
が、来年元旦の15分よりスペシャル番組とい
放映するとの事ですので、御期待下さい。
また、競走は9人のスタッフを持って、衛星
通信インマルサットで、即日そしてほぼ毎日、
新聞報道をするとの事。私もインマルサットを
利用し、東京へ電話したとこ30秒程で
Holiday Inn Lhasaつながり、ひらくりました。
NO. 1 NATION ROAD, LHASA, CHINA TEL: 22221 23222
CABLE: 7391 LHASA CN TELEX: 68010 HILSA CN
ラサより第一回通信として、



FAX 06-365-5871

島川法律事務所内
大阪市立大学山王会館



1991年日本・中国ナムチャバルワ合衆山岳
事務局/〒103 東京都中央区日本橋小町2番2号 旗房日本橋ビル5F
TEL: 03(3)49-1115 FAX: 03(3)49-7816
(セ/2)山王会館/〒102 東京都千代田区西船場5-4 マンビユー・パインビル5F
TEL: 03(3)26-4422 FAX: 03(3)26-1441

前略、日本では、これからボツカ紅葉し、秋山シーズンに入る頃でしょうか。ここナムチャバルワBCは高度3520m
見渡せば、広葉樹があり、所々赤く染まっています。ヤルツァンホウ川沿いにベンガル遠より湿って暖い風が上がるのでしよう C1 4300m迄は、つたやコケのついた密林の中を歩きます。うっそうとしたジャングルは亜熱帯の世界です。しかし、200m程下れば、竹林があり、日本の山を歩いている雰囲気です。見降るせば、ヒマラヤ謎の川ヤルツァンホウ屈曲部入口が濁々と流れています。見上げれば、圧感ナムチャバルワ7182mが世界最高峰にふさわしい山容を、4ハットの青い空に誇っています。そんな中に、BCがあります。亜熱帯より雪と氷の世界まで、誰も踏み入れた事がない自然の中に、6つのキャンプを設け、頂上にアタックします。10/4日現在、C2迄建設されました。
登山活動が始まって3日目ですので、出始めめとしては順調に進んでいます。(もともと雪が出るのはC2以上ですか?)
小生の今の心境としては、ナムチャバルワとヤルツァンホウに囲まれて桃源郷の中にいる様な幸せを感じています。物資の山を見ると少しうんざりしますが、元気にしております。
頂上に雪煙が舞う11月末迄が登山期間です。地震も時々ある(大きいものは数10年に一度との事)ようですが、天災にも人災にも会わず、全員元気に山を下りたいと思います。
来年新年会で御会する事を楽しみにしております。
御支援有難うございました。

10/5. ナムチャバルワ登山院BC
片岡泰彦 (55年) に

(PS. 4ハットの奥地からのFAXで驚かれるかも知れませんが、読売新聞社の衛星通信、インマルサットで、日本とダイレクトに連絡、即日転送体制がとれる様になっています。小生もびっくりしました。)

片岡氏壮行会

奥田尚志

8月22日、日本山岳会を主体とした日中合同ナムチェバルワ登山隊で遠征されることになりました片岡氏の壮行会を、東京支部で行いました。

場 所： 新橋「きよ」（大倉先輩の御世話によりました）

出席者： 大倉豊彦、廣谷光一郎、堺 皓二、北濃祥二、丸子隆志、
佐藤一良、宮崎多一郎、兵藤 渉、義本幸一、片岡泰彦、
奥田尚志、

および、神戸大学OBで、今回のナムチェバルワで日本側通訳で行かれる梶田さんの出席を得、合計12人という人数になりました。大病から回復された廣谷先輩の出席も得て、最後は、山の歌を歌いまくり、盛り上がりのうちに終了しました。

ナンガ・パルバット敗退の記

和田城志

今回で3度目の敗退である。84年ディアミール壁から7900m、86年ルパール中央側稜から7800m、そして今年バツィン南東柱状岩稜から8000m、全てルート核心部を越え頂上直下にて断念を余儀無くされた。

これだけナンガ頂上に迫った登山者は、私だけであろう。その偏執度においては、ヘルリッヒ・コファー博士に譲るとしても、この山を最も知る一人であると自負している。当然頂上を除いての話ではあるが。

柱状岩稜の完登は、故イエジ・ククチカからのポーランド隊によって85年に成された。最も新しいルートであり、最難最高のルートである。その技術的難度は最上級であり、その状況は論外に危険であった。はっきり言って、彼ら欧州のスーパークライマー達は狂人である。こんな論理性ないハードルートをよくも開拓し

たものだ。只々脱帽するしかない。

82年、このルートを試みたドイツ人、G・リッター氏が偶然に我々のBCを訪れ、色々と話がはずんだ。彼はエベレスト、カンチも登っているし、共通の話題が多かった。彼らのパーティでも最高点まで登った隊員が両手両足全ての指を凍傷で失ったというし、85年には1名雪崩によって死亡している。我々は1名が落石により、肩とアゴを骨折したが、何とか生命は失わずにすんだ。全員が落石と雪崩の洗礼を受けたが、大事には至らなかった。本当に運が良かった。我々の実力から考えて、頂上直下に迫っただけで十分満足すべきだろう。後悔はあんまりないというのが本音である。

実際、この山の雪崩はすごい。その巨大さ、その頻度、ランタンリルンの比ではない。4500mの高差をもって落ちる迫力は素晴らしい景観だ。我々が岩壁に身を寄せながら75日間も攀じてきた姿は全く喜劇的だ。小賢しい人間の能力を遙かに越えた所で山は泰然として存在している。征服などという言葉はコッケイだ。コソ泥のように、頂上をかすめるというのが正確な表現である。

それにしても3度も失敗するとは、この山とは余程相性が悪いのだろう。仲間と言う。「失敗する度に計画がエスカレーションする。成功せんはずや。」

「頂上は目標ではあるが目的ではない。如何にして登るか、その重機と過程こそが山登りの本質である。名より実が洗練された者の選ぶ道だ。」と、大見栄をきりたい。まあ、夢は先送りにした方が楽しみも大きいというところだろうか。

次なるナンガをどうするか。小雨の煙る帰路、雪雲に閉ざされた山を見ながら考えた。答えはない。確かなことは肉体が朽ちるだけ、精神は踊る。ナンガパルバットを心から愛している。彼女が微笑むかどうか何の確証もないが。

ああ、こわかった。

山 行 記 録

北アルプス・立山山脈薬師岳登山記録

Under the great influence of the no.17th typhoon.

高木健次

1. 9月13日（金）

- ① 昨夜までの予報により、17号台風と今回の登山が全くぶつかりそうな見通しを知り、対策に苦慮しながら富山へ行った。→松本・高木の二人。
- ② 芦原温泉発→富山着。富山地铁にて有峰口下車。駅前から白樺ハイツにIn、マイクロで迎えに来てくれた。

2. 9月14日（土）…台風17号さんよ、どうぞお先に！

- ① 白樺ハイツでの昨夜のTVニュース（気象）により、今日夕方～夜間通過が確実視されるに至り、又、松本から、太郎平小屋へのIn連絡により既にNo.17 Typhoon の影響が出ている、今日の登山は控えた方がベター、との交信内容から登山中止を決定。→台風が先行（攻）、我々の登山が後攻となった。

- ② 従って、松本・高木は近畿地方にない所…ということで魚津の金太郎温泉に遊んだ。

- ③ 本来、今夜は登って太郎平小屋泊の予定だった。白樺ハイツも土曜は満員とのこと→隣の貴水館が空いていたので、宿を変更した。

17：00頃から20：50頃が最も風が強かった。21：00頃に海岸沖を通過した。

3. 9月15日（日、敬老の日）

- ① No.17 typhoon is over. いよいよ我々の出番だ。貴水館より前夜注文の通り、タクシー 6：00すぎに来て、二人は乗車した。

- ② 折立ヒュッテ前 7：00スタート。

少しピッチが速かったのか、7：25～7：35で休憩。→→ついに三角点

1870.6m到着 8：30→又、ガスが深くなってきた。ガラガラ道を登ると、高原状の尾根に出た。しかし、視界は近くだけしかきかぬ。→→10：45 残り

1.2km地点、急に視界が開けて、時々、目指す薬師岳が見えかくれし始めて二人は歓声をあげ、写真休憩。→緩い坂道で、かなり公園的に道路整備を進行中だった。少し、ピッチをあげて11：17太郎平小屋到着。宿泊手続きをとる。

- ③ 山菜ウドンの昼食終了。

サブザックで12：05小屋出発。薬師の山稜は見えている。少し下って薬師峠（2294m）12：20通過→登りがガレ場になる。薬師平は大きなケルンが特徴（13：00）槍ヶ岳の穂先がよく見えていた。 万一、下りでガスに巻かれたら…と心配で、位置関係を覚え込むのに努力した。登りになり、右斜め前方に薬師岳を見ながら稜線を行き、14：00薬師小屋。9月中旬なので閉めてい

た。頂上まで50分の表示あり。これから最後の登りにかかる。東側より吹き上げる強い風にさらされて、Wind-Breakerを着用していてもグングン体温を奪われる。登りもジグザグ道をあえぎながら少しづつ歩む。両手が冷たくなるのを何とか防ぎつつ。(二人とも手袋を太郎平小屋へ置いてきた。ミステイクだ)。避難小屋14:25少し西側の道になって風害から少し救われる思い。それほどの登りもなく、頂上 2,926mに14:40到着。薬師如来祠を拝む。記念撮影を少し。寒さと時刻を考慮して頂上には10分間いただけ。

幸いにして、今なら視界が利く。2658m少し上部ハイマツ帯で雷鳥3羽発見、しばらくの間二人で観察していた。珍しくナゴム風景。薬師平、ケルンを左に見てからグルッと左に曲がって例のガレ場に入る。16:20薬師峠に来てヤレヤレ。太郎小屋に16:35到着。ああ疲れた。カラダだけでなく、色々の気象的变化に対応策を考えつつ歩いているのでココロも疲れる。平地は敬老の日。我々は体育の日であった。

4. 9月16日(月、振替休日)

スッキリした好天。5時半の小屋の朝食には昨夕食より既に10名程少ない人数。縦走組は既にオニギリ(朝食)を持ってかなり歩いた頃だろう。好天で下りだけなので気は楽である。6:00太郎平小屋出発。剣・立山三山がよく眺められる。三角点7:20。これから木の根の多い道を降りることになる。ぬれた木の根に滑らぬように慎重に降りて8:27折立ヒュッテ到着。下山無事終了。

懐かしの東沢へ ひゃー12年ぶりだー

西沢裕子

メンバー： 西沢裕子、矢倉 睦

9月20日 『きたぐに』を待つ。真光教のお姉ちゃんに無事を祈ってもらい、八木氏からはビールの差し入れ、きっとこの二人の善行が効いたのだろう、全行程快晴であった。

9月21日 久し振りのザックの重さにもめげず、室堂からの龍王岳への登り淡々と歩を上げる。時々稜線はガスに巻かれるものの五色への縦走路ははっきりと確認。ザラ峠への下りはその名の通りずるずる滑り台で神経を使う。現役時は登りが耐え難いものだったが、30才を過ぎて膝に負担がくるようになった。

五色ヶ原は一面のお花畑の名残をそのままに、素敵なテント場。我等のダンロップよりも確実に高価なテントが他に2つ。しかし夕食は勝ってると感じた。ししゃもに大蒜のしそ漬けだぞー。熊本に帰ったら絶対買うのだ。

9月22日 平の渡しまで忍の一字で下り続ける。ヌクイ谷の白蛇姿がいつのまにかゴーゴーと音をたてる広河原になった時、「黒部にいるなぁ」と感じた。

10時の渡し船までに余裕の到着。平の小屋のビールは今年一番の旨さ。

読売新道の梯子は、透明な清流とカルピスに慰められどうにか終了。東沢出合の大きな岩の上で思いきり腰を伸ばす。不安だった東沢への入口は、奥黒部ヒュッテから5分の所、古い指導標に示されてあった。

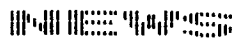
9月23日 谷が明るいのでプレッシャーも少ない。地図とのにらめっこを繰り返しながら、右岸を忠実に辿り、一ノ沢、二ノ沢、三ノ沢ときて、やっぱり出ました嫌なへつり。残置ハーケンとテープがなかったらどうしてだろう。先行パーティに感謝。テクテクのんびり河原歩きが続く。何となく東沢と一体感。いや一回だけ疎遠になった。2000m付近か、高巻きの踏み跡が50m程で笹藪になり進むには手強そうだし、谷へ下りるには不透明だし、でザックを下ろして偵察30分。西沢が藪こぎ嫌いなので、二人お猿さんよろしく木から木へと飛び移る（過大描写）。下降完了。ホッ。

両側の山肌が整然とした高木帯から賑やかな集団に変わり、紅・黄と彩りを交え、扇状地形が認められる頃幕営。やっとな源頭か？

9月23日 出発して1ピッチ、小さくなった水流が谷の終わりを告げた。水筒満タンと急傾斜で息が荒くなる。ハイマツのにおいに励まされ、ゆっくりと稜線に踏み込む。神経使ったようなのんびりできたような、そんな東沢に再見。

後はコースタイム参照。

- 9/21 室堂 9:30ー龍王岳ーザラ峠14:10ー五色ヶ原15:00 ▲1
9/22 △1 6:00ー平の渡し 9:05ー東沢出合13:00ー15:00 ▲2
9/23 △2 6:30ー一ノ沢 6:35ー二ノ沢 7:30ー三ノ沢 8:35ー高巻き終了
13:30ー2200m地点15:30 ▲3
9/24 △3 6:30ー東沢乗越 8:15ー水晶小屋 9:30ー雲ノ平12:15ー
薬師沢出合15:30ー16:00 ▲4（この幕営は違反です。すみません）
9/25 △4 6:10ー太郎小屋 9:00ー折立休憩所12:30



☆ ☆ ☆ ☆ OCUSA発足記念誌発行に向けて

小松 稔

昨年にOCUSA（大阪市立大学スポーツアソシエーション）が設立され、2年目を迎えました。この間、当初年度に予定されていた名簿の発行については先送りされることとなり、別に発足記念誌の発行という形で、2年目ではありますが、発足記念行事として行われることになりました。

9月19日に記念誌発行についての打ち合わせが市大構内で行われ、当会からは大橋会長と小松が出席しました。記念誌の内容ですが、各OB会の現状並びに今後についての抱負などを含め、各会の紹介文などを掲載し、トータルで160ページ程度を考えていることなど具体的な案が出されました。

当会のPR文については、これまでの山岳部並びに山岳会の成果、現状、また登山界の現状等をまとめさせて頂きました。

記念誌の配付ですが、平成4年3月に完成し、各OB会、クラブ、関係各団体等へ配付する予定になっています。

これからもOCUSAの活動につきまして会員各位にもお世話をおかけすることになるかと思いますが、よろしくお願いします。

☆ ☆ ☆ ☆ 編集後記

先日、映画『K2』を見てきました。8000mの迫力は期待すべくもありませんでしたがストーリーはますますで（一般受けするものですが）、ついホロッとするシーンも。いつまでも山に行きたいという思いを強くしました。

雪の恋しい季節、皆さんお正月休みの山行計画に余念のないことと存じます。どうぞ原稿をお寄せください。原稿用紙2～3枚でお願い致します。次回は3月1日発行の予定です。

（矢倉 睦）